2019 年 7 月推薦図書

【危機管理学部　鈴木　秀洋先生】

『傷ついたあなたへ１』NPO 法人レジリエンス著　梨の木舎　2005 年
『傷ついたあなたへ 2』NPO 法人レジリエンス著　梨の木舎　2010 年
『マイ・レジリエンス―トラウマとともに生きる』中島幸子著　梨の木舎　2013 年

　ＤＶ・性暴力は、稀に被害にあう人がいるのではなく、日々多くの人が被害にあっている。この本は、「傷ついたあなたへ」、またサポートする人、教員等に対し、ＤＶ・トラウマへの正しい理解を促し、暴力の影響を乗り越え自分らしく輝くための知識・知見（ワーク等含む）を示し伴走してくれる（1 巻）。ＤＶの辛さ、そして加害者理解、回復の途中で気を付けておきたいこと、自分を大切にする歩みなど、実に具体的で実践的である（2 巻）。温かさと優しさが伝わってくる。一人で読むのでも、みんなでワークをしながらでも良いだろう。
　そして読後更に、中島幸子『マイ・レジリエンス』を読んでほしい。きっと心の奥底まで響くはず。皆さんにとってのバイブルとなってくれる本である。

『何を怖れる－フェミニズムを生きたおんなたち』松井久子著　岩波書店　2014 年

　本書は、田中喜美子、上野千鶴子ら 12 人の日本を代表するフェミニストの伝言を収める。著者の松井久子は、かってフェミニズムに偏見をもち距離を置いてきたと吐露する。しかし、彼女らの言葉を聞き、女達の分断の原因は、幼年から「いい子」であり続ける教育を受け、もめたくない、嫌われたくない、何かを変える力はないと思わされてきた自身らに巣食う「怖れ」にあると気付く。「個人的なことは政治的である」と女の痛みや苦しみの原因となる社会（構造）と戦ってきた彼女らのありのままの「女としての固有の人生」を映し出すことで、次世代への力強い応援歌となっている。学生たちが「怖れ」なく生きていけるよう、私もここでフェミニスト宣言！本書の後は一緒にＤＶＤ鑑賞をして議論をしよう。

『家族幻想－「ひきこもり」から問う』杉山春著　筑摩書房　2016 年

　目黒区事件、野田市事件、札幌市事件と児童虐待死事件が続く。また同時期の殺傷事件を機に「ひきこもり」を問題視する報道も過熱する。これらの事件に通底するのは、脈々と引き継がれてきた「家族」に対する「幻想」ではないか。筆者は、私達は現代社会に合わせて加工された命を生きなければならないのだろうかと問う。そして、社会が流動化し、家庭が孤立化し、個人が様々なものに分断される今、私達に処方箋を示す。「「この社会はあなたのそして私の場所だ」とまず、子どもと若者に伝えなければならない」他者に眼差され、値踏みされ、社会に評価され位置付けられるのではなく、「生きる主体としての自分を作り出す営みが不可欠」であり、私達にできることはまだまだあるはずであると。